

週刊 瀬上方言

黒木 邦彦

蜷池言語研究所所長

甲南女子大学講師



図1 飯島列島の位置

ふと思い立って、鹿児島県^{かみこししま}上飯島^{せがみ}瀬上(現地では [セッガーミ seŋa:m'i] A¹) の伝統方言の~~教科書~~文法書を週刊で書いていくことにしました ([注] 2012年8月29日現在)。瀬上方言というのは、僕が時々Facebookに平仮名書きで投稿しているアレです。

なお、『週刊 瀬上方言』は「創刊号 無料 (通常無料)」, つまり、常に無料です (デ アゴ〇ティ〜ニ♪ (泣))

1 上飯島瀬上 (2012年8月29日執筆; 同年9月10日改訂)

上飯島は串木野新港 (鹿児島いちき串木野市) の西方約 38km の東シナ海上に浮かぶ離島で、中飯島^{なかこししま}や下飯島^{しもこししま}などと飯島列島を形成しています。

¹ カタカナと国際音声字母 (IPA) で [] 内に音声を表記し、音調型を A ないし B で示します。A 型音調語と B 型音調語のアクセントは次のとおりです:

- (I) A 型音調語: ○, ○○, ○[○]○, ○]○(○)○, [○]○○(○)○, [○]○○○(○)○, ... (主頂点は次末尾モーラ)
- a. ミ]ージ, ミ[ジ]ロ, ミ]ー(ジ)ー, ミ]ジ(マ)ネ, ミ]ジ(ユ)イガ ‘道; ーと; ーに; ーまで; ーより’
- b. ウ]ーユ, ウ[イエ]バ, ウ[ヤ]ッタ, ウ]ヤ(セ)ラ, ウ]ヤッ(タ)イバ ‘売る; ーれば; ーられた; ーさせた; ーられたら’
- (II) B 型音調語: H, LH, HLh, LHLh, LHLLh, LHLLLh, ... (主頂点は末尾モーラ)
- a. サ]ー(ル), サ]ル(ロ), サ]ーリ(ー), サ]ルマ(ネ), サ]ルユイ(ガ) ‘猿; ーと; ーに; ーまで; ーより’
- b. カ]ー(グ), カ]ゲ(バ), カ]カッ(タ), カ]カセ(ラ), カ]カッタ(イ)バ ‘書く; ーけば; ーかれた; ーかせた; ーかれたら’
- (注1) ●[: 上昇 ●]: 下降 ●(): 当該モーラを高く発音することも

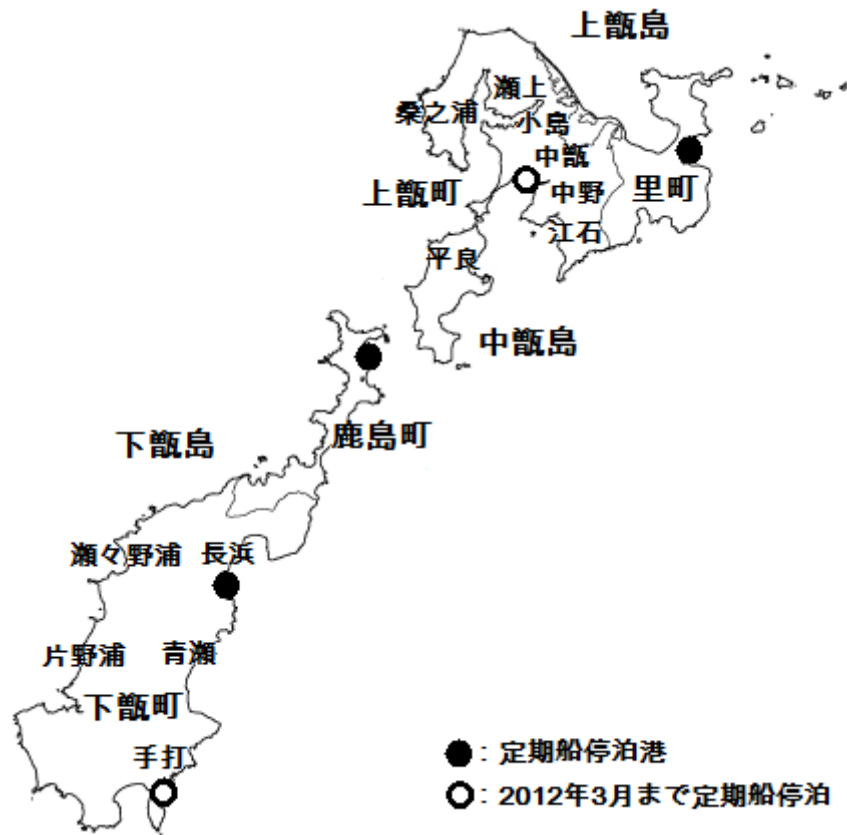


図2 飯島列島

瀬上は鹿児島県薩摩川内市上甑町（旧同県薩摩郡上甑村）^{おおあざ}の大字の一つで、2011年度の国勢調査によれば、当地の人口は212人です。1950年代には1,000人近くの人が当地で暮らしていたそうなので、相当な減りようです。

瀬上は、一見すると、どこにでもありそうな集落ですが、当地の方言は強烈です。このことは、‘黒砂糖’‘桜島’‘板敷き’‘漕いだ’をそれぞれ次のように言うことから分かるでしょう：

- (1) a. [クヨニャロー kujonaro:] B ‘黒砂糖’
- b. [サグヤニマ sagujanima] A ‘桜島’
- c. [イラニーギ irani:gi] B ‘板敷き’
- d. [ケーナ ke:na] B ‘漕いだ’



図3 下甌手打診療所
(黒木撮影)

【余談】

下甌島には、『Dr. コトー診療所』のモデルとなった、下甌手打診療所 (cf. 図3) があります。

瀬上方言も日本語の一種なのですが、上記のように、標準日本語とは音声の面でかけ離れています。そのため、初見 (言語だから初聞?) ではまず分かりません。鹿児島方言の中では最も難しく、本土方言の中でも、津軽方言と一、二を争うのではないかと思います。

土地の人々と伝統方言でペラペラ喋れたら素敵なんですけど、現時点では、会話を半分くらい聴き取るのがやっとです。

話者数が限られている伝統方言は、コミュニケーションの道具として活躍する機会が限られています。この面では英語などには遠く及びません。したがって、伝統方言の教科書を作っても、需要はほとんどないでしょう。

表1 甌島列島の人口 (町別, 大字別; 2011年)

里町	里							
1,314	1,314							
上甌町	中甌	中野	江石	平良	小島	瀬上	桑之浦	
1,532	547	53	175	309	172	212	64	
鹿島町	藺牟田							
517	517							
下甌町	手打	片野浦	瀬々野浦	青瀬	長浜			
2,298	790	167	205	229	907			

それでも瀬上方言の教科書を作るのは、言語という無形文化を一つでも多く記録・保存するためです。残念なことに、瀬上方言も他所の伝統方言と同じく、消滅の危機にあります。僕が知る限り、50代の方々も結構話せますが、80代の方々に比べると、やはり相当に共通語化しています。母語話者がいなくなった言語の再生は困難を極めるので、危機言語の記録・保存は母語話者が健在であるうちに終えなければいけません。

危機言語の記録・保存は、「人間の寿命を延ばす」だとか、「アフリカ大陸の砂漠を緑化する」だとか、「経済を好転させて、新たに雇用を生む」だとかには貢献しません (笑)

「人間の所産である文化を人様に迷惑を掛けない範囲で継承していくことは、絶対的に善である」という前提でこの仕事に取り組んでいることを、どうかご理解下さい。

幸い、今は僕のような庶民でも、インターネットを通じて、全世界に情報を発信できます。これを活用して、瀬上方言（更には甕島列島）の存在を広めることができれば、この上なく幸せです。来月（[注] 2012年8月29日現在）から週刊で進めていきます。

なお、作成にあたっては、次の文献に多くを学んでいます。黒木も、2010年9月以来、半年に一度の頻度で現地に足を運んで、母方言話者の方々に教わっています（自分の論文も書かないといけませんね）:

参考文献

- [1] 上村 孝二 (1965)「上甕島瀬上方言の研究」,『鹿児島大学法文学部紀要文学科論集』1, pp. 21-49, 鹿児島大学法文学部
- [2] 南 不二男 (1967)「鹿児島県甕島瀬上方言の音韻体系」,『方言研究年報』10, pp. 1-17, 広島大学方言研究会
- [3] 尾形 佳助 (1987a)「上甕島瀬上方言の形態音韻論」,九州大学大学院人文科学府・昭和62年度修士論文, 未公刊
- [4] 尾形 佳助 (1987b)「上甕瀬上方言の子音体系」,『九州大学言語学研究室報告』8, 九州大学文学部
- [5] 尾形 佳助 (1988a)「上甕瀬上方言の人称代名詞」,『九州大学言語学研究室報告』9, 九州大学文学部
- [6] 尾形 佳助 (1988b)「上甕瀬上方言の音韻の記述」,『日本方言研究会 第46回研究発表会発表原稿集 (於国学院大学)』, pp. 46-54, 日本方言研究会
- [7] 木部 暢子 (2001a)「甕島方言の音声の特徴について—概説と語彙資料集—」, 真田信治 (編)『日本語の消滅に瀕した方言に関する調査研究』(「環太平洋の言語」成果報告書 A4-001), pp. 125-79, 大阪学院大学情報学部

話者の生年が異なることもあって、[1-7]の資料の質は均一ではありません。僕が見たところ、[1, 2]と[3-6]と[7]と(僕が現地調査で得た資料と)では、文法の面でも語彙の面でも違いがあります。そこで、話者の生年が問題になる事項があれば、その都度言及します。

2 音韻論

先日 ([注] 2012年9月10日現在), 瀬上方言の音声は標準日本語のそれとかけ離れて

いると言いましたが、それは言語形式の音形²に限ってのことです。瀬上方言で発する音声は、日本語母語話者が日常的に発しているものとあまり変わりません。音声の組合せも標準日本語に似ているので、音声を書き写すだけであれば、仮名でも事足ります。

しかし、瀬上方言の音声を体系的に学ぶのであれば、この方法は望ましくありません。瀬上方言では、語の音形が一定の規則に従って様々に変化するので、その一つ一つを暗記するよりも、音声の体系（専門的には“音韻”と言います）を理解する方が効率的なのです。

そこで、本稿ではローマ字を使いながら、瀬上方言の音韻を勉強していきます。日本語母語話者には抵抗があるかと思いますが、どうぞ宜しくお付き合い下さい（以降は常体で書いていきます）。

2.1 音声的音節の構造 (2012年9月21日執筆; 同年9月29日改訂)

瀬上方言の語 (word)³の音形を分析すると、次のことに気づく:

- (2) a. 子音 (略号: C) を含まない語はあるが、母音 (略号: V) を含まない語はない (∴語は1個以上の母音と0個以上の子音から成る)。
[イ i] ‘胃’, [ウイ ui] ‘瓜’, [o] ‘緒’, [オイ oi] ‘私’⁴, [アッタ at:a] ‘有った’
- b. 母音で始まる語も子音で始まる語も適格である。
i. [イン in] ‘犬’, [ウラ ura] ‘歌’, [オース o:su] ‘押す’, [アーシ a:ei] ‘足’
ii. [ビンタ b^hinta] ‘頭’, [ジェン dʒen] ‘銭’, [キモン k^himon] ‘着物’, [クエ k^we] ‘食え’
- c. 母音で終わる語も子音で終わる語も適格である。ただし、後者はいずれも [—Vŋ] で終わる。
i. [ジョイ dʒoi] ‘草履’, [シーボ ei:bo] ‘尻尾’, [アニャ ana] ‘痣’, [スバ suba] ‘唇’
ii. [オン on] ‘鬼’, [ウラン uran], ‘売らん’, [コニン kopin] ‘来ずに’, [カンマン kam:an] ‘構わない’
- d. 母音連続 (長母音を含む。以下同様) で始まる語はあるが、子音連続 (長子音を含む。以下同様) で始まる語は少なく、型も決まっている (ほとんどが

² 言語形式と認められる音列のこと。‘木’‘足’‘頭’を意味する言語形式の音形は、標準日本語では [キ, アシ, アタマ k^hi, aei, atama], 瀬上方言では [キー, アーシ, アラマ k^hi, a:ei, arama]。

³ 最小の自立形式。本稿では、語と接語 (clitic) とから成る句 (phrase) に相当する、次のような形式も含める:

- (I) a. [mu:ei:] ‘虫に’, [u:ei:] ‘白に’, [m^hise:] ‘店に’, [pese:] ‘臍に’, [kuca:] ‘草に’
b. [mu:ei:] ‘虫は’, [u:sa:] ‘白は’, [m^hise:] ‘店は’, [pesa:] ‘臍は’, [kusa:] ‘草は’

⁴ 1人称名詞はいずれも男女共用。以下同様。

長鼻音)。

- i. [イーヲーユ i:wo:ju] ‘言ってる (進行)’, [ウイヨ uijo] ‘後ろ’, [オーミ o:m'i] ‘海’, [アーヅギ a:ŋ'i] ‘顎’, [アイタ aita] ‘明日’
- ii. [ンメ m:e] ‘梅’, [ンマ m:a] ‘馬’, [ンマガ m:aga] ‘旨い’, [ンダー nda:] ‘私達は’⁵, [ンーノン n::oŋ] ‘私達’, [ンノヅゲ n:ŋe] ‘私の家’
- e. 母音連続で終わる語はあるが, 子音連続で終わる語はない。
[ツイ tsui] ‘釣り’, [トイ toi] ‘鳥’, [サイ sai] ‘しなさい’, [メーヅゲー me:ŋe:] ‘眉毛’, [ダンポー dampo:] ‘ランプ’
- f. 子音間に生起しうる母音の最大数も, 母音間に生起しうる子音の最大数も 2 である。
- g. [VVC, VCC, CCVV] はあるが, [VVCC] はない。
 - 1. [ウーシ u:ei] ‘牛’, [セービ se:b'i] ‘蟬’, [ヅォ:ŋo] ‘上手’
 - 2. [カッパ kap:a] ‘包茎ではない陰茎’, [ウンナ un:a] ‘熟れ{過ぎ}た’, [ワッコ wak:o] ‘お前 (同年以下の男女に対して)’⁶
 - 3. [ニンニョーノン niŋ:o:ŋoŋ] ‘瞳’, [ブクイ buk:ui] ‘ふっくら’, [メックー mek:u:] ‘盲’

(2) から分かるように, 瀬上方言の語の音形は規則的である。これを記号化すると, 次のとおり:

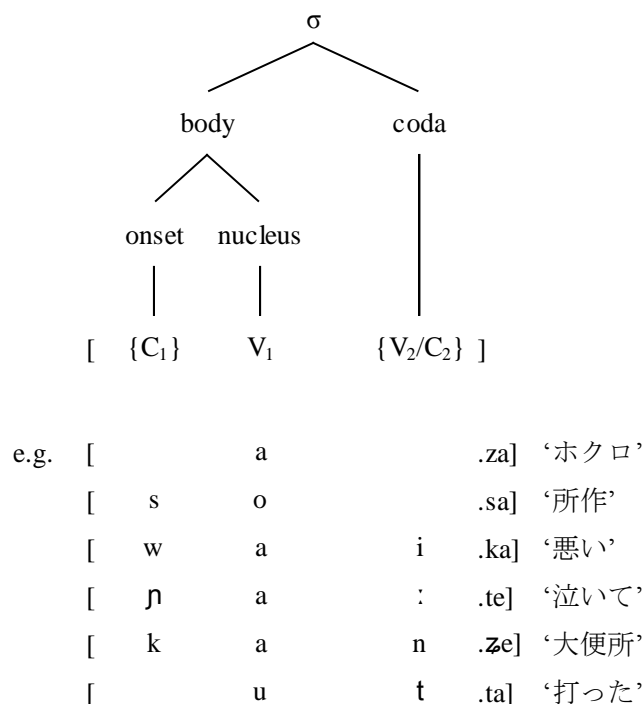
(3) [w {C}V{V/C}{C}V{V/C} ... {C}V{V/C}]

(注 1) ●{X}: X は任意の要素 ●A/B: A ないし B。

(3) から分かるように, 瀬上方言では, [{C}V{V/C}] の繰り返しで語を作る。この音声群を音声的音節と見なし, それぞれの要素を次のように名付ける:

⁵ 尾形 (1988a) によれば, [ンーダー n:da:] と発音する話者もいるとのこと。

⁶ 2 人称名詞もいずれも男女共用。以下同様。



(注1) ●σ: 音節 ●.: 音節の境界

図4 音声的音節の構造

V₂, C₂の種類は次のように限られている:

- (4) a. 次のように, V₂は (i) 狭母音 [i] ないし, (ii) 長母音の後半である:
1. [ウイヨ ui.jo] ‘後ろ’, [オロヨイカ o.ro.joi.ka] ‘恐ろしい’, [アイタ ai.ta] ‘明日’
 2. [イーギ i:.gⁱ] ‘息; 咳’, [テーレ te:.re] ‘炊いて’, [ワーウ wo:.u] ‘追う’
- b. 次のように, C₂は (i) 鼻音ないし, (ii) 長子音の前半である:
1. [ビンタ bⁱin.ta] ‘側頭部’, [ヨンケー joj.ke:] ‘読みに’, [イン iv] ‘犬’
 2. [セPPER sep.pe:] ‘たくさん’, [ベツダガ bed.da.ga] ‘違う’, [フッゲラ φug.ge.ra] ‘膨れた’⁷

V₂を coda とする (そして, nucleus の一部とも次音節の nucleus ともしない) のは, 次の理由に拠る:

- (5) a. 生起位置に関して C₂と排他的関係にある (=V₂と C₂は共起しない)⁸。

⁷ 長子音を . で別々の音節に分割する場合, その後半の : は当該子音の IPA に書き換える。

⁸ このように考える上で問題になるのは, [oiŋke] ‘泳ぎに’ の音節構造である。これが [oiŋ.ke] であれ

- b. C₂と同じく, A型音調語の主調点にはなれない。

2.2 音素目録

日本語母語話者が日常的に使っている仮名の多く (全てではない) は, 2種類の音声を続けて発したものを表している。たとえば, 「か」が表しているのは, カ行音 [k] に, ア段音 [a] を続けて発した [ka] である。前半 (=行の音) の [k] などを“子音”と, 後半 (=段の音) の [a] などを“母音”と言う。

2.2.1 母音音素 (2012年9月10日執筆; 同年9月21日改訂)

2.2.1.1 母音の分布

里方言で耳にする母音は [i, u, e, o, a] である。これらは次のように分布している:

表2 母音の分布

	#__	σ__	C__	C ^j __
[i]		*	*	
[u]		?		
[e]	*	*		*
[o]		*		
[a]		*		

(注1) ●σ: 音節 ●#__: 語頭 (=初頭音節頭) ●σ__: 第2音節以降の音節頭 *: 不適合格 ? : 稀少

[i, u, e, o, a] は onset と結び付いて, body を形成する。[i, u, o, a] は単独でも body になれるが, [ɔi, ɔu, ɔo, ɔa] (要素の欠如を ɔ で示す) は次のように制限されている:

- (6) a. [ɔi, ɔa] は第2音節にはない。
- i. [イーシ *i:ei*] ‘石’, [イッゴージュ *ig.go:.ju*] ‘行きつつある’, [インビーギ *im.bi:gi*] ‘鼾’
 - ii. [アニエ *a:ne*] ‘畦’, [アッバ *ab.ba* (旧), アブヤ *a.bu.ja* (新)] ‘油’, [ad.da.ga] ‘危ない’

ば, V₂とC₂との共起を例外的に認めなければならない。しかし, B型音調で [óinjke] ないし [oiŋké] と発音するので, その音節構造は [o.iŋ.ke] である。

- b. 第2音節以降の [ɔo] はいずれも [wo] に由来する。
- i. [オロ o.ro] ‘音’, [オゼ o.ze] ‘老成した人’, [オシロイ o.ei.roi] ‘^{おしろい}白粉; 化粧’
 - ii. [イヲ i.wo (旧), イオ i.o (新)] ‘魚’, [シヲ ei.wo (旧), シオ ei.o (新)] ‘塩’, [トヲー to.wo: (旧), トオー to.o: (新)] ‘遠く’, [トヲーユ to.wo:.ju (旧), トオーユ to.o:.ju (新)] ‘通る’
- c. 第2音節以降の [ou] は一部の動詞に限られている。
- i. [ウイエ u.je] ‘上’, [ウイカ ui.ka] ‘薄い’, [ウローラ u.ro:.ra] ‘歌った’
 - ii. [ヲーウ wo:.u] ‘追う’, [カーウ ka:.u] ‘買う’, [ハヤーウ ha.ja:.u] ‘払う’

母音の分布と音形の形態音韻的交替を踏まえて、次に挙げる5種類の母音音素を抽出する:

- (7) 瀬上方言の母音音素: ●/i/ [i] ●/u/ [u] ●/e/ [e] ●/o/ [o] ●/a/ [a]

(注1) ●/A/[B]: /A/ は [B] と発音する ●/A/[B~C]: /A/ は、特定の環境では [B] と、その他の環境では [C] と発音する

舌の位置の違いに基づいて母音音素 (7) を整理すると、表3のようになる:

表3 母音音素

	前舌	中舌	後舌
高舌	i	u	
半高/低	e		o
低舌		a	

/i, u, a/ の抽出は容易であるが、/e, o/ のそれは考察を要する。よって、次節と次々節とで、/e, o/ の抽出作業を開示する。

2.2.1.2 /e/ の抽出

[ɔe] を期待する箇所は、次のように [je] となっている:

- (8) [イエ je] ‘家; 絵’, [イエナ je.na] ‘二の腕; 枝’, [イエンピツ jem.p'i.tsu] ‘鉛筆’, [フ

イエ $\phi u.je$ ‘笛’, [コイエ $ko.je$] ‘声’

尾形 (1988a) は, [ɔe] vs. [je] の最小対として次の例を挙げている:

(9) [エーラ $e:ra$] ‘飽きた; 開/空いた’⁹ vs. [イエーラ $je:ra$] ‘焼いた’

よって, 厳密に言えば, [ɔe] vs. [je] は弁別的である。しかし, [エーラ $e:ra$] 以外で [ɔe] を含む語は, 失敗した時に発する感動詞 [エー $e:$] くらいしかない。したがって, 次のように, [e] と [je] とを /e/ の条件異音と解釈することも可能である:

(10) /e/ → [je] / .__
→ [e] / elsewhere

(注1) ●/A/ → [B] / C: /A/ は環境 Cにおいて [B] で実現する ●.__: 音節頭 ●elsewhere: 未指定のあらゆる環境

ただし, 本稿では [je] を /je/ と解釈する。その理由は次のとおり:

- (11) a. (9) のとおり, [ɔe] vs. [je] の最小対が存在する。
b. /e/ の直前の /j/ を消去するという規則を立てずに済む。
i. [フヨ ϕujo , フヤー $\phi uja:$, フイエー $\phi uje:$] ‘風呂; 一は; 一に’
ii. [ハヤ $haja$, ハヤー $haja:$, ハイエー $haje:$] ‘腹; 一は; 一に’
[je] を /e/ と解釈すれば, (i) /fujo, fujaa, fuee/, (ii) /haja, hajaa, haee/ となり, /je/ と解釈すれば, (i) /fujo, fujaa, fujee/, (ii) /haja, hajaa, hajee/ となる。前者の解釈では, /e/ の直前の /j/ を消去するという規則を余計に立てなければならない。

2.2.1.3 /o/ の抽出

次のように, 初頭音節では [ɔo] と [wo] とを弁別する:

- (12) a. [オイ oi , *ライ woi] ‘私’, [オーミ $o:m^i$, *ヲーミ $wo:m^i$] ‘海’, [オース $o:su$, *ヲース $wo:su$] ‘押す’ (cf. [イエーラ $je:ra$, *ウエーラ $we:ra$] ‘押した’)
b. [ヲーウ $wo:u$, *オーウ $o:u$] ‘追う’, [ヲーラ $wo:ra$, *オーラ $o:ra$] ‘追った’

⁹ 尾形 (1988a) は ‘開いた’ の音形を [エーラー $e:ra:$] としているが, この音形は [エーラ $e:ra$] //ak!-i-ta// ‘飽きた; 開/空いた’ に接尾語 //a// ‘～わ’ を加えたものである。

また、第2音節以降に [ɔo] を含む語はない。第2音節以降で [ɔo] を期待する箇所は、次のように [wo] となっている:

- (13) [イヲ i.wo] ‘魚’, [シヲ ei.wo] ‘塩’, [トヲー to.wo:] ‘遠く’, [トヲーユ to.wo:.ju] ‘通る’

第2音節以降の [wo] は [o] とは対立していない。したがって、第2音節以降の [wo] は /o/ とも解釈できる。しかし、次の例を踏まえて、第2音節以降の [wo] は /wo/ と解釈する。

- (14) a. [イヲ iwo, イワー iwa:, イウエー iwe:] ‘魚; ーは; ーに’
b. [シヲ eiwo, シワー eiwa:, シウエー eiwe:] ‘塩; ーは; ーに’

第2音節以降の [wo] を /o/ と解釈すれば、(14a) /io, iwaa, iwee/, (14b) /sio, siwaa, siwee/ となり、/wo/ と解釈すれば、(14a) /iwo, iwaa, iwee/, (14b) /siwo, siwaa, siwee/ となる。前者の解釈では、/o/ の直前の /w/ を消去するという規則を余計に立てなければならない。

2.2.2 子音音素 (2012年9月10日執筆)

日本語方言全般に言えることかもしれないが、子音音素の数に対する見解は、母音音素のそれに比べると、一定しない。

このような事情はあるが、瀬上方言の子音音素の数¹⁰は標準日本語のそれとほとんど同じである。先行研究の記述と筆者の調査結果を踏まえると、瀬上方言では次の16種類の子音音素を使い分けているように思う (弱気):

- (15) 瀬上方言の子音音素: ●/p/ [p] ●/b/ [b] ●/f/ [ɸ] ●/m/ [m] ●/w/ [w] ●/t/ [t ~ ɾ]
●/d/ [d ~ n] ●/c/ [tɕ ~ tɕ ~ z ~ z] ●/s/ [s] ●/z/ [ɕ ~ ɕ ~ ɲ(z)] ●/n/ [n] ●/r/ [ɽ ~ ɽ]
●/k/ [k ~ g] ●/g/ [g ~ ŋ] ●/j/ [j] ●/h/ [h]

(注1) /j, w/ はその他の子音とは音韻的特徴を異にするが (詳細後述)、ここではその他の子音と同様に扱う。

(注2) /i/ の直前では規則的に口蓋化し、次のように実現する (cf. §2.2.2.1):

- /h/ [ç] ●/p/ [pʰ] ●/b/ [bʰ] ●/k/ [kʰ] ●/g/ [gʰ] ●/s/ [ç] ●/m/ [mʰ] ●/n/ [ɲ] ●/r/ [ɽʰ ~ ɽʰ]

¹⁰ 日本語式に表現すれば、子音の数は「行」(カ行, サ行, タ行 etc.) の数と同じ。

調音点、調音法の違いに基づいて子音音素 (15) を整理すると、表 4 のようになる:

表 4 子音音素

		唇音	舌頂音	舌背音	咽喉音
阻害音	閉鎖音	p b	t d	k g	
	破擦音		c		
	摩擦音	f	s z		h
共鳴音	鼻音	m	n		
	弾き音		r		
	接近音	w		j	

2.2.2.1 口蓋化

多くの場合、子音 [C] とそれを口蓋化させた [C^j] とは、次のように分布している:

表 5 [C, C^j] の分布

	_i	_u	_e	_o	_a
[C]	*				
[C ^j]			*		

分布表 5 を素直に解釈して、子音音素 /C, C^j/ を抽出するのは、次のように経済性の面で問題がある:

(16) /C₁, C₂, C₃ ... / と対立する /C₁^j, C₂^j, C₃^j ... / を一々設けると、子音音素がその分倍増する。

そこで、音素 /j/ ([ju, je, jo, ja] の [j]) を利用して、[C^j] を /Cj/ と解釈する。ただし、[C^ji] を /Cji/ と解釈すると、瀬上方言では許容されない /ji/ を認めることになり、矛盾

する。分布表 5 のとおり、[C^ji] は [Ci] とは対立していないので、[C^ji] の [C^j] の音素は [C^ju, C^jo, C^ja] の [C^j] のそれとは異なるとも解釈できる。

また、[C^ji] は [C^ju, C^jo, C^ja] よりも圧倒的に広く分布している ([C^ju, C^jo, C^ja] を合わせても、[C^ji] には遠く及ばない)。このことを踏まえると、[C^ji] の [C^j] と [C^ju, C^jo, C^ja] の [C^j] とを音韻的に同一のものと見なすのは、憚られる。

よって、[C^ji] は /Ci/ と解釈する。/Ci/ が [Ci] ではなく、[C^ji] で実現するのは、/i/ [i] の影響で口蓋化するからだろう。

分布表 5 を以上のように解釈して、次の音素を抽出する：

- (17) ●/C/: /Ci, Cu, Ce, Co, Ca/ ●/Cj/: /—, Cju, —, Cjo, Cja/
 [Cji, Cu, Ce, Co, Ca] [—, C^ju, —, C^jo, C^ja]

2.2.2.2 唇音系音素

瀬上方言で耳にする唇音 [p, p^j, b, b^j, φ, φ^j, m, m^j, w] は、次のように分布している：

表 6 唇音の分布

	__i	__u	__e	__o	__a	[+obs]__	[+nas]__
[p]	*						
[p ^j]		*	*	?	?		
[b]	*						
[b ^j]		*	*	?	?		
[φ]	*		*	*	?	*	*
[φ ^j]	?	*	*	*	*	*	*
[m]	*					*	
[m ^j]		?	*	?	?	*	
[w]	*	*				*	*
[w ^j]	?	*	*	*	*	*	*

(注 1) ●[+obs]__: 阻害音の直後 ●[+nas]__: 鼻音の直後

次の音列は希少である：

- (18) a. [p^jo]: [ip^joo] B (古くは [ip:uu]) ‘一俵’

- b. [p^ja]: [ɾop:^ja:gu] B ‘六百’, [hap:^ja:gu] B ‘八百’
- c. [b^jo]: [b^jo:k^ji] A ‘病気’, [haib^jo:] A ‘結核’
- d. [b^ja]: [samb:^ja:gu] B ‘三百’
- e. [φi]: [φi:ra] A ‘拭いた’, B ‘吹いた’, [to:φi:] B ‘豆腐に’
- f. [φa]: [to:φa:] B ‘豆腐は’
- g. [m^ju]: [mju:ro] B ‘夫婦’
- h. [m^jo]: [daim^jo:] A ‘大名’, [koik^jidaim^jo:ziŋ] A ‘甗大明神’
- i. [m^ja]: [mja:gu] A ‘脈’
- j. [w^ji]: [w^ji:ra] A ‘浮いた’

分布表 6 を次のように解釈して、唇音系音素 /p, p^j, b, b^j, f, m, m^j, w/ (p^j, b^j, m^j は 1 音素ではない) を抽出する。

- (19)
- /p/: /pi, pu, pe, po, pa/ ●/p^j/: /—, —, —, (pjo), (pja)/
 [p^ji, pu, pe, po, pa] [—, —, —, (p^jo), (p^ja)]
 - /b/: /bi, bu, be, bo, ba/ ●/b^j/: /—, —, —, (bjo), (bja)/
 [b^ji, bu, be, bo, ba] [—, —, —, (b^jo), (b^ja)]
 - /f/: /fi, fu, fe, fo, fa/
 [φ^ji, φu, φe, φo, φa]
 - /m/: /mi, mu, me, mo, ma/ ●/m^j/: /—, (mju), —, (mjo), (mja)/
 [m^ji, mu, me, mo, ma] [—, (m^ju), —, (m^jo), (m^ja)]
 - /w/: /(wi), —, we, wo, wa/
 [(w^ji), —, we, wo, wa]

【次回予告】

舌頂音系音素の抽出